

【論考】

国際共修の検証

-文献リサーチを通して見えてくるもの-

Reviewing Intercultural Collaborative Learning: What does Literature Indicate?

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 末松 和子

SUEMATSU Kazuko

(Institute of Excellence in Higher Education, Tohoku University)

キーワード：国際共修、多文化クラス、海外留学

1. はじめに

今世紀に入り急速に進展した高等教育の国際化は、日本の大学にパラダイムシフトをもたらした。OECDのキーコンピテンシー¹をはじめ、欧米豪を中心に進んだ、21世紀型スキル、汎用能力(Transferable Skill)、雇用されうる能力(Employability)等のジェネリックスキルを主眼に据えた教育改革が、我が国の「学士力」や「社会人基礎力」の土台となった。また、1980年以降、世界レベルで留学生の流動が活発化し、日本でも『留学生30万人計画』(文部科学省、2008年)の策定と推進により、留学生の受入拡大が図られた。その後、相次いで事業化された、いわゆるグローバル施策²が大学の国際化を様々な側面で後押しした。カリキュラム、入試制度、教育支援、大学組織経営などが見直され、英語のみで学位が取得できるコース、海外留学を卒業要件とするプログラムが次々と新設された。それまでの日本の大学では考えられなかった改革が実行され、大学および大学関係者の価値観に大きな影響を与えた。グローバル施策・事業が、留学生数を押し上げ、グローバル人材育成を教育理念・目標に掲げる大学も増えた。施策と連動した教育の国際化の進展で、学生と国内学生の正課内外における接触機会も自然と増し、異文化間教育や言語教育分野を中心に、多様な言語・文化を

¹ 単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求(課題)に対応することができる力。1. 社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力(個人と社会との相互関係)、2. 多様な社会グループにおける人間関係形成能力(自己と他者との相互関係)、3. 自律的に行動する能力(個人の自律性と主体性)から成る。(文部科学省http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1399302.htm 2019年1月15日閲覧)

² 国際化拠点整備事業『大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業：2009年～2013年、文科省』、『経済社会を牽引するグローバル人材育成支援事業：2012年～2016年、文科省』、『スーパーグローバル大学創成支援事業：2014年～2023年、文科省』など

持つ学習者を対象とした教育実践の取り組みが始まった。それまで当たり前であった、日本で生まれ育った学習者を想定したカリキュラムや授業実践が徐々に見直され、留学生と国内学生の協働・交流が生み出す学習効果に着目した教育・研究が散見されるようになった。

2. 留学生と国内学生の協働を取り入れた国際共修

多様な言語・文化背景の学生が、意味ある交流 (Meaningful Interaction) を通して学び合う授業・活動形態を、坂本・堀江・米澤 (2017) は、「学び合い」と称し、著書で日本国内の大学の実践事例を紹介しながら教育実践の効果に言及している。本稿ではこの学び合いを「国際共修」と呼ぶ。多様な文化背景をもつ学習者の学びを、二者による共同学習をイメージさせられる「共修」とすることに違和感を覚える人がいるかもしれない。しかし、日本の高等教育機関では、国内学生以外の学生を「留学生」と一括りにすることが多く、異文化・多文化理解をテーマとした文献でも、学習者を「国内学生 (もしくは日本人学生)」と「留学生」の対で捉えている。そこで、敢えて、二つの異なる学習者群を一緒にすることの意義を強調し、「共修」本来の意味の、「異なる二つの学生群が一緒に勉強すること」に力点を置く。本稿では、留学生と国内学生の協働・交流活動を「国際共修」とし、以下に定義する。

言語や文化背景の異なる学習者同士が、意味ある交流 (Meaningful Interaction) を通して多様な考え方を共有・理解・受容し、自己を再解釈する中で新しい価値観を創造する学習体験を指す。ただ単に、同じ教室や活動場所で時間を共にするのではなく、意見交換、グループ・ワーク、プロジェクトなどの協働作業を通して、学習者がそれぞれの物事へのアプローチ (考察・行動力) やコミュニケーション・スタイルから学び合い、知的交流の意義を振り返るメタ認知活動を、視野の拡大、異文化理解力の向上、判的思考力の習得、自己効力感の増大などの自己成長につなげる正課内外活動を国際共修とする。国際共修の学習者には、大学生のみならず、地域社会の住民や初等中等教育機関の、世代や立場を越えた多様なステークホルダーが含まれる。

国際共修の先進国である欧米豪では、すでに、異文化・多文化教育 (Intercultural Education) をカリキュラムの国際化、内なる国際化 (Internationalization at Home) の一環として位置づけ、理論に基づいた教育実践、ペダゴジー開発・改善、学習成果・効果検証 (McGrath-Champ、Zou、Taylor、2013) が進められている。Soria と Troisi (2014) が実施した米国の大規模研究州立大学の学生を対象とした調査 (N=15,807) では、留学経験者よりも国内の正課内外活動に従事した学生の方が、調査で用いた尺度 (Global International Intercultural Competency) が高いスコアを示すな

ど、国際共修活動の効果が実証されている。

3. 文献リサーチの背景とねらい

近年、日本でもこの国際共修をテーマとした報告が、学会や大学主催のシンポジウム、セミナー等でも見られるようになって来た。しかし、その多くが教育実践の紹介や報告である。国際共修の効果や学習者の成果に着目したものも含まれるが、教育実践者が自身の担当する授業や活動を研究対象としている報告が多い。では、論文をはじめ、文書化された発表はどうであろうか。論文は、学会等での口頭発表に比べ、完成度と学術性が高いイメージはあるが、国際共修をテーマとした研究成果報告で引用されている文献は、専門分野も様々で全容を把握しづらい。そこで、本稿では、前述の国際共修の定義に基づき、筆者が携わる国際共修プロジェクト³で文献調査対象とした日本国内の論文等をまとめ、整理する。また、現在進行中の文献リサーチの途中経過を報告するとともに、国際共修教育実践・研究の実態に迫る。

4. 調査方法

収集した約200の刊行物のうち、国内で発表された論文127編を対象とした。主な収集方法は、国立情報学研究所のCiNii Articles検索、インターネット、論文等の引用のトレーシングである。検索にあたり、「国際共修」、「多文化共修」、「多文化クラス」等のキーワードを用いた。後述するが、掲載媒体が大学や学部の紀要、およびそれに準ずる刊行物の場合は、CiNii検索で検出されない場合もあるため、論文で引用された文献も確認しつつデータ収集を行った。書籍については、取り扱う章単位の検索が困難であったため、今回の調査対象からは除外した。また、学会などの発表論文抄録も対象から外した。

5. 調査結果

今回の調査で対象とした127編のうち、最も古い論文は、倉地（1994）の『広島大学日本語教育学科紀要』に掲載された「大学における多文化間教育としての日本語・日本事情教育」であった。最新の論文は2018年掲載分の10編である。なお、2018年の掲載論文については、まだ発行過程にある刊行物もあるため、今後、数が増えることが十分想定される。論文が掲載された刊行物を、①研究成果を発表・議論するために組織された学会もしくは研究会が定期的に発行する学会誌、②大学や大学内の組織（例：研究科、学部、学科）が定期的に発行する紀要もしくはそれに準ずる刊行物、③公共性の強い機関・組織が発行する機関誌、に三分類した。②については、総称として紀要を用いた。以

³ 文部科学省科学研究費基盤研究（B）一般「アジアの高等教育を牽引する「内なる国際化モデル」の開発（研究代表者：末松和子）

下に、発行年、発表論文タイトル、著者名、発表誌種別、をまとめる。発表誌の名称は、本稿の趣旨との関連性が希薄なこと、また誌面の都合でここでは割愛する。

発表年	論文タイトル	著者名	発表誌種別
1994	大学における多文化間教育としての日本語・日本事情教育	倉地暁美	紀要
1996	異文化間教育における学習援助者の育成：ジャーナル・サポート・ネットワークにむけて	倉地暁美	紀要
1997	留学生と日本人学生の相互交流と対人認知の変容 - 異文化理解授業の実践を通しての考察 -	新倉涼子	紀要
1999	大学コミュニティにおける日本人学生と外国人留学生の異文化間接触促進のための教育的介入	加賀美常美代	学会誌
1999	留学生と日本人学生の交流教育	坪井健	学会誌
1999	多文化クラスと創造性 - 学生による討論形態の模索か -	徳井厚子	紀要
1999	多文化クラスにおける評価の試み - 自己変容のプロセスをとおして見えてくるもの -	徳井厚子	機関誌
1999	留学生と日本人学生の初級会話合同クラス：双方向学習による異文化コミュニケーション能力の育成	松本久美子	紀要
2000	大学生の教育・生活に関する価値観、並びに大学教育に対する適応-異文化接触が大学教育適応に与える効果-	中川かず子 神谷順子	紀要
2000	共同作業による多文化理解教育の実践と課題	脇田里子	機関誌
2001	大学における国際交流の有効性	篠原昭雄、佐藤猛郎、竹内恒理	紀要
2002	留学生教育における新たな授業の視点	植木節子	学会誌
2002	英語を共通言語とした大学院における異文化間コミュニケーションクラスの試み - タスク活動における教師の役割	田崎敦子	学会誌
2002	留学生日本語学習支援ボランティアグループ「てらこや」の活動と意義	早矢什彩子	紀要
2002	「留学生と地域社会」：留学生を通ずる新たな国際交流の視点を探る	阿波村稔	紀要
2002	留学生を活用する国際理解教育の内容・方法と教育効果に関する研究	大島まな 田村知子	紀要
2002	日本人学生の異文化接触に関する研究-留学生との接触による意識の変容について-	神谷順子 中川かず子	紀要
2004	日本人と外国人が共に学ぶ教室大学院教育実習の場合	坂池田広子、金孝卿、古市由美子、平野美恵	紀要
2005	個に対応した教育-多文化共生の視点をふまえて	齋藤真宏	紀要
2005	日本人学生と留学生とが共に学ぶ意義：『異文化間教育論』受講者のコメント分析から	高橋亜紀子	紀要
2005	地域の「国際化」と大学の貢献	有田佳代子	紀要
2006	教育的介入は多文化理解態度にどんな効果があるか - シミュレーション・ゲームと協働的活動の場合	加賀美常美代	学会誌
2006	異文化教育における留学生の役割	中野はるみ	紀要
2006	留学生と日本人学生の合同授業の創出	花見禎子	紀要
2006	自律学習のための試み 言語習得の場からの考察	村上千智 後藤倫子	紀要
2006	留学生との交流活動実践から見えてくるもの-「気づき」を通じた異文化間コミュニケーション能力の養成に向けて-	園田博文、奥村圭子、内海由美子、黒沢晶子	紀要

2006	東北大学の多文化クラス	押谷祐子	学会誌
2007	短期留学生と日本人学生を対象とした今号クラスにおける異文化間ソーシャルスキル学習セッションの実施	高濱愛 田中共子	学会誌
2007	異文化接触による相互の意識の変容に関する研究-留学生・日本人学生の協働的活動がもたらす双方向的効果-	神谷順子 中川かず子	紀要
2007	ジェンダーの視点からの「日本事情教育」への示唆-中国人留学生・日本人学生のジェンダー意識調査から-	中河和子、濱田 美和、神川康子	紀要
2007	多文化クラスの受講経験と、意識・言語行動に関する一考察	小山 宣子、尾 中夏美、松岡洋 子、宮本律子	学会誌
2008	留学生・日本人学生合同の日本事情授業：留学生から学ぶ日本事情	足立恭則	紀要
2008	異文化間協働プロジェクトにみられる教育効果	末松和子 阿諾娜	学会誌
2008	国際交流と学生のグローバル・リテラシーの向上 アンケート調査による分析	稲葉みどり	紀要
2008	学生主体型青年国際シンポジウムの実施と評価	古内綾子、高木 裕子、佐藤綾、 神谷慶美、宮林 千尋	紀要
2008	異文化理解の授業における高校生の学び：肯定的な自己像の構築	森山美雪	学会誌
2008	多文化への「気づき」から「共生」への方途-多文化クラスの日本人学生に焦点をあてて（特集：多文化理解の可能性）	加納 陸人	紀要
2009	地域における異文化間教育プログラムの試みと課題-多様な異文化間、国際理解教育プログラムの実践活動より-	安達理恵	紀要
2009	国際ボランティア・プロジェクトにおける異文化間相互作用の分析-相互理解をめざした対話のプロセス-	出口朋美 八島智子	学会誌
2009	多文化環境下における日本人大学生の異文化葛藤への対応-AUC-GS 学習モデルに基づく類型の探索-	奥西有里 田中共子	学会誌
2010	留学生教育交流の実情と多文化共生への可能性 ～FSA としての実践報告～	渡邊優生	紀要
2010	留学生と日本人学生の 異文化間コミュニケーション能力育成を 目指した協働学習授業の提案 異文化間コミュニケーション能力理論と実践から	北出慶子	紀要
2010	インターネットを活用した異文化間の協働を促す学習環境デザイン-実践共同体の組織化の視座から-	岸磨貴子、今野 貴之、久保田 賢一	学会誌
2011	共通教育課程における「国際共修ゼミ」の開設 - 留学生クラスとの合同による多文化理解教育の試み -	佐藤勢紀子、 末松和子、曾根 原理、[他]	紀要
2011	多文化共生の視点による国際理解・国際交流活動の取組	渡邊優生	紀要
2012	異文化理解のための遠隔ワークショップのデザイン	岸磨貴子 大谷つかさ	紀要
2012	愛知教育大学におけるグローバル人材の育成の取り組み タイからの招聘研究者を人的資源として	稲葉みどり	紀要
2012	異文化との出会い-教室内で異文化意識を高める	長岡真理子	紀要
2012	高等教育における人権教育の実践-留学生と日本人学生の混合クラスの一考察-	宮本（高橋） 美能	学会誌
2012	日本人学生と留学生の異文化交流-異文化接触、協働的活動を通じた大学生生活への適応と意識変容-	中川かず子	機関誌
2012	合同授業を通じた留学生と日本人学生の異文化交流	原沢伊都夫	機関誌
2013	異文化交流授業から国内学生は何を学んでいるか：多文化共生力育成をめざして	坂本利子	紀要
2013	留学生と日本人学生の親密化阻害要因を排除する方策 - 多文化クラスにおける参与観察に基づいて -	宮本美能	学会誌
2013	大学生の多様なバックグラウンドを生かした教育活動 - 留学生と日本人学生の混合クラスにおける人権教育プログラムからの示唆 -	宮本美能	学会誌

2013	多文化リタラシー向上のためのプロジェクト：リベラルアーツ型教育におけるジェネリックスキル養成	稲葉みどり	紀要
2013	人文科学歴史学の多文化共修共生授業の意義と実践：英語によって外国人学生と日本人学生とに	芳賀満	紀要
2013	日本人学生の多文化クラス受講の効用：留学生との友人関係構築に関して	藤美帆	学会誌
2014	キャンパスに共生社会を創る-留学生と日本人学生の共修における教授法の確立に向けて	末松和子	機関誌
2014	多文化間プロジェクト型協働学習における留学生の学び - 留学生と日本人学生がともに地域を学ぶプロジェクトから -	中島祥子	紀要
2014	多文化クラスで人権教育を実践する意義 - 授業前と後の質問紙調査結果に基づいて -	宮本美能	学会誌
2014	日中韓の大学生による共同体験学習の効果と課題について 大邱大学研修における日本人学生の成長を中心として	入江 詩子	紀要
2014	「小学校外国語活動」を中心とした大学と附属小学校の協働実践	和泉元千春、岩坂泰子、吉村雅仁、大谷陽子	紀要
2014	日韓大学生の学習とエンゲージメント：日韓大学生調査の分析から	山田礼子	紀要
2014	高等教育機関における OECD の KEY COMPETENCIES 主要能力の育成を目指した言語文化教育プロジェクトの構想	稲葉みどり	紀要
2014	多文化交流科目の開発経緯と意義および課題	青木麻衣子 小河原義朗	紀要
2014	東北大学を「母校」にするプロジェクト：国際共修ゼミ「多文化クラス」を発展させた大学紹介ビデオ制作	押谷祐子、虫明美喜、上原聡 [他]	紀要
2015	留学生と日本人学生の国際共修授業における一考察 - 言語の問題へのアプローチと学習効果 -	高橋（宮本）美能	紀要
2015	電子制御系コンテストを通じた国際交流の試み	本田久平、軽部周、Tomek Ziemba、貫川経夫	学会誌
2015	教員養成大学における留学生と日本人学生の協働を通じた異文化間能力の育成-国語教科書を読む会の実践から-	和泉元千春 岩坂泰子	紀要
2015	筑波学院大学オフ・キャンパス・プログラムにおける留学生の社会参加活動について	亀田千里	紀要
2015	グローバル社会における国際理解力の育成に関する研究	黄梅英、孟慶栄、森田明彦、張濤、穆紅、目黒恒夫	紀要
2015	アクティブラーニング導入期における参加型学習の役割	入江詩子	紀要
2015	授業として行うプロジェクト型学習とコミュニケーション教育	會澤まりえ	紀要
2015	多文化クラスにおける日本人学生と留学生の協働学習	服部明子	紀要
2015	英語を主言語としたゼミで効果的に働く日本語の談話能力 -日本語母語話者と非母語話者間の議論の促進を目指して-	田崎敦子	学会誌
2016	多文化共修科目の挑戦：2015年春学期「異文化理解とコミュニケーション」の授業実践と振り返り	岡 智之	紀要
2016	「日本」を題材とした協働学習の仕掛け - 教養教育における実践から考える -	ガイタニディスヤニス、小林聡子、西住奏子、和田健、吉野文	紀要
2016	神戸大学におけるバイリンガル国際共修授業：『グローバルリーダーシップ育成基礎演習』の授業設計について	黒田千晴 ハリソン・リチャード	紀要
2016	日本文化のクラスにおけるアクティブラーニングの実践 -すずめ踊りプロジェクトでのアクションリサーチを通じた一考察-	島崎薫	紀要
2016	国際交流室と学生の海外派遣の推進	菅原隆行	紀要
2016	主体性と異文化受容力を育成する正課外プロジェクト型教育の実践と評価 WACE 世界大会の学生企画活動の事例より	中西佳世子、中沢正江、木村成介、山本尚広、荻野晃大、下田幸男、平春菜	紀要

2016	多文化交流活動に必要なコミュニケーション能力を育成するための日本語スタンダードの開発	小河原義朗	紀要
2016	多文化共生を目指した留学生・日本人学生によるグループ活動の実践：-タスク達成プロセスの相互行為からみる	山田明子	学会誌
2016	異文化体験のカルチャーショック：米国大学生の日本短期研修から	稲葉みどり	紀要
2016	群馬大学インターナショナルキャンプ報告 - 学生間交流促進と相互理解の実践 -	大和啓子、古川敦子、Sylvain Bergeron、牧原功	紀要
2016	留学生との交流授業が日本人に与える影響と意義	池谷知子	紀要
2016	異文化理解教育における日中大学生合同授業の試み	陳瑞英	紀要
2016	日本語ボランティア活動がグローバル人材育成につながる可能性	久保田美映、鈴木理子	紀要
2016	多文化共生社会に向けた人材育-国際教育の実践を通して-	黒田千晴 ハリソン・リチャード	機関誌
2016	留学生と大学の国際化	田中京子	紀要
2016	留学生と日本人学生の間が多文化共生の関係性を促進する方策-国際共修授業の事例考察を基に-	高橋美能	機関誌
2016	Case Study of An International Joint Class With International and Japanese students: Learning Effects and Approaches taken regarding Language	高橋美能	紀要
2016	国際共修授業における言語の障壁を低減するための方策	高橋美能	紀要
2016	グローバル化時代における「共生」に向けた教育の試み - サービス・ラーニング科目「日本人と留学生の協働学習」の実践から -	林加奈子	紀要
2017	地域住民との国際共修 -留学生のアイデンティティの変化に着目して-	島崎薫	紀要
2017	「内なる国際化」でグローバル人材を育てる - 国際共修を通じたカリキュラムの国際化 -	末松和子	紀要
2017	カリキュラム国際化と国際共修：留学生と国内学生の学びあいをデザインする-第38回研究大会公開シンポジウムの報告を中心に-	末松和子	学会誌
2017	プロジェクト型「国際共修」が学生の自己効力に与える影響-Kolbの経験学習モデルを用いてデザインした授業に関する一考察-	水松巳奈	紀要
2017	多文化コミュニケーション能力測定尺度作成の試み	宮本律子 松岡洋子	紀要
2017	「多文化共生をめざした日本語教育プロジェクト(すきやねんにほんご)」の実践による支援者の気づき:参加した多様な院生の成長	遠山千佳	紀要
2017	地域社会を学びの空間とした多文化間共修-日本人学生の情動の変容と気づき-	山田直子	機関誌
2017	京都産業大学グローバルcommonsにおける英語ワークショップの事例報告	尾崎良子	紀要
2017	海外研修を通じた異文化理解・多文化共生に関する考察 アジア文化演習を通じて	塩谷もも	紀要
2017	異文化理解教育のための中国人留学生との接触促進の試み	寺西光輝	紀要
2017	外国語教育をめぐる異文化理解に関する一考察	白銀研五	紀要
2017	留学生と学ぶ異文化理解	保坂律子	紀要
2017	日本語ボランティア活動がグローバル人材育成につながる可能性	久保田美映 鈴木理子	紀要
2017	多文化共生の実現を目的とした国際交流の実践-留学生は日本人学生との小学校クラブ活動企画を通して何を学んだか-	服部明子 林朝子	紀要
2017	日米グローバル共同教育の実践：学生・教員の異文化協働とバディシステム	カッティング 美紀、恵万江里	学会誌

2017	グローバル化時代における国際教育の展望と課題 -異文化理解の授業を通して-	ヨフコバ四位 エレオノラ	紀要
2017	異文化協働プログラムの両義性と境界線-境界線を乗り越えるための教育デザインの 実践分析-	村田晶子	学会誌
2017	グローバル社会を思索するアクティブラーニングと協働-対等を志向する実践を目指 して-	吉野文	学会誌
2017	概念図の協働作成を通して「文化」のとらえ方を問い直す-クリティカル日本学を事 例として-	Ioannis GAITANIDIS	学会誌
2017	多文化クラスにおけるチーム・エスノグラフィーの教育実践	徳永智子 井本由紀	学会誌
2017	「多文化クラス」の評価分析再考-アクティブラーニングの評価の課題-	徳井厚子	学会誌
2017	協働学習における授業改善の経緯と教師の役割：共修授業「グローバルコミュニケ ーション」「日本事情グローバル」の授業実践報告から	足立祐子 池田英喜	紀要
2017	地域住民との国際共修：留学生のアイデンティティの変化に着目して	島崎薫	紀要
2018	平成29年度学術交流協力締結校学生交流プログラム参加報告 韓国中央大学校赤十 字看護大学との交流	山本直子 水野昌美	紀要
2018	失敗に学ぶ成功へのカギ 学生主導による国際交流の企画と実践	稲葉みどり	紀要
2018	留学生を支援する日本人チューターの学び-PAC分析を用いたアジア圏チューターの事 例から-	岡部真理子	紀要
2018	本学学生の国際交流に関する意識調査	加藤法子、鳥越 郁代、吉村美奈 子、Ian Stuart Gale [他]	紀要
2018	東京基督教大学における「異文化理解」の学びに関する教育効果の検証 日韓関係の ケーススタディーを通して	徐有珍	紀要
2018	ディスカッション授業による大学生と留学生の異文化理解	福岡昌子	紀要
2018	地域住民との国際共修で留学生は何を学んだのか：仙台すずめ踊りの実践を通して	島崎薫	紀要
2018	異文化間能力の変容から見る異文化間協働学習の教育的効果：接触仮説とその発展 理論の可能性	西岡麻衣子 八島智子	学会誌
2018	多文化間共修をめざす「談話分析」の授業デザイン：初回と2回目の授業実践の事 後課題の分析	池田智子	学会誌
2018	地域の大学間での合同授業の試み-秋田大学と国際教養大学の留学生による多文化ク ラス-	平田未季、阿部 祐子、嶋ちはる	紀要

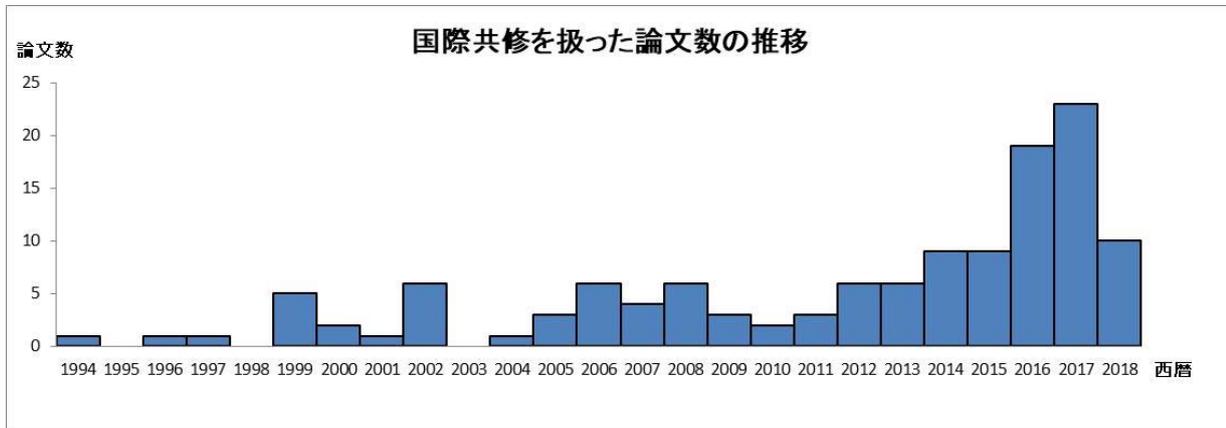
6. 考察

国際共修をテーマとした過去25年間の論文127編を精査し、明らかになった研究・教育の成果報告の特徴、傾向、課題等を以下に整理する。

6.1 論文数と推移

今回の調査における最大の成果は、日本国内の国際共修を扱った論文数の把握であった。欧米豪では、多数の研究成果が教育関連の専門誌等で発表されているが、日本でこれだけ多くの報告が存在することは、これまで確認されてこなかった。四半世紀で130編近くの成果報告がなされていること、また既に、1990年代半ばから国際共修が実践され、その成果が報告されている事実は特筆に値する。1994年は1編のみであった論文数も、年を追うごとに増加し、一連のグローバル事業が始まる2009年以降、右肩上がりとなる。留学生受入数増に伴う学習者の多様化と、国内学生に対するグローバル教育の拡充が、留学生と国内学生の接触機会を正課内外で広げ、意味ある交流を生み出した。そして、

学習者による言語・文化を越えた協働・交流の効果を、国際共修に携わる教育実践者・研究者が研究または報告の対象としたことが論文数増加の主要因であろう。



6.2 多様性に富んだ報告

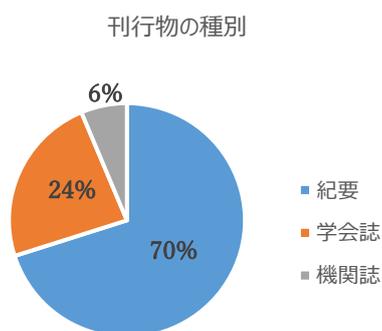
論文のタイトルから見て取れるように、国際共修活動を多様な視点でとらえた報告が多い。異文化理解、異文化コミュニケーション、国際理解教育に焦点を当てたもの、日本事情や留学生の適応支援等、日本語教育や留学生支援をテーマとした報告、地域社会との交流活動や初等中等教育現場を題材としたものなど、多岐にわたる。また、国際共修の効果検証に特定の教育実践アプローチや分析方法を用いる例も見られる。協働・交流期間も、数回の短いものから授業実施期間（3ヶ月以上）のものまでである。接触頻度や活動内容、使用言語、活動場所等もそれぞれ異なり、国際共修が様々な学習活動に取り入れられていることが分かる。執筆者については、定期的に国際共修をテーマとした成果報告を行う研究者もいるが、多くが一編のみの執筆に留まる。国際共修が比較的新しい教育実践であることも影響しているのであろうが、他の学術分野の教育実践者や研究者が、何らかの機会に国際共修に関与し、成果報告を行うに至ったケースも考えられる。これらより、国際共修が徐々に教育現場全般に浸透し始めていることが推察される。

6.3 論文の特徴

まず、論文の発表誌については、紀要が89編と最も多く、全体の7割を占めた。学会誌が30編、機関誌が8編であった。紀要については、竹内（2012）に詳しいが、学会誌に比して、発行部数が少なく、入手経路や報告対象者が限られていること、査読や編集に十分なマンパワーが充てられていないことなどから、学術性が低い「灰色文献」と批判されることが多い。他方、人文社会科学分野では、学会誌の掲載に量的な制約があるため、紀要に質の高い論文が発表されるケースもある（竹内、2012、p74）。この指摘の通り、今回の対象論文のうち、紀要に掲載されたものの多くが教育実践の報告であ

った。効果検証を含む報告もあるが、特定の理論に基づきリサーチクエスチョンや仮説を立てた検証・分析ではなく、学術論文とは異なる性質のものが目立った。中には、Allport(1954)の接触理論や、経験学習理論(Kolb, 1984)を用いて学習者の意識や内省活動の質の変化(学び)を検証するなど、学会誌のいくつかの論文よりも学術性に富んだものもあった。しかし、総じて今回の調査対象論文は、実践報告が多数を占め、そのほぼ全てにおいて、研究対象が執筆者自身の教育実践であった。また、調査に用いられるアンケート等は、独自に開発されたものが多かった。これは、海外の発表論文との大きな相違点の一つといえる。国際専門誌等で発表される研究の多くは、調査の信頼性を高めるために、自身の授業の受講者等、利害関係にある学習者を研究対象とはせず、調査分析の客観性を担保する何らかの方策が取られている。もちろん、アクションリサーチのように、研究者が自身の主観をも研究対象に含める手法は別である。また、異文化感受性発達尺度(Intercultural Development Inventory)などの、学術的にも確率された尺度が用いられていることが多い。

次に、アンケートやインタビューを取り入れた質的研究が多いのも特徴としてあげられる。研究対象が教育実践対象となり、受講者・参加者の数が限定されるため、量的研究に適したデータの収集に至らない、または、国際共修に携わる研究者がそもそも質的研究手法に、より明るい、などの理由が考えられる。単著が全体の7割に上ることも、教育実践者が調査対象を個人で管理できる範囲内で選定し、検証結果を報告する傾向が強いことを示唆している。定性的研究で重視される、研究者のバイアスの認識や信頼性の担保について言及した報告はごく僅かであった。



	単著	86
共著	2人	24
	3人以上	17

7. むすび：国際共修成果報告の課題と発展

本稿では、現在筆者が分析を進めている国際共修の調査の一部を紹介し、文献から見える国際共修の実態および研究報告の特徴や課題を提示した。過去25年間に執筆された論文は、国際共修の広がりを示しており、教育実践の実態を把握する上での貴重な資料となる。また、論文数の推移が、大学の国際化政策やグローバル事業の発展に比例していることも興味深い。論文の数や多様性は、欧米豪等の国際共修先進国を凌ぐと言っても過言ではない。日本の多くの研究者が国際共修に関心を持ち、そ

の意義の情報発信に高いモチベーションを抱いていることが確認出来た。今後は、国際専門誌等にも積極的に成果を報告し、日本の教育実践の海外におけるプレゼンスの向上に努められるとよいであろう。

しかし一方で、今回調査対象とした論文は研究としての要素にやや欠ける教育実践報告が目立った。理論という視座に基づき、リサーチクエスションや仮説を追いながら検証に臨む研究カルチャーの醸成が求められる。国際共修の効果、とりわけ学習者のラーニングアウトカムに焦点を当てた研究や、自己効力感や自己肯定感、学習モチベーションなどの、一般的に学習到達目標には明示されない、学習者の内面的な変化や精神面での成長に焦点を当てた研究はまだ事例が限られているため、今後の研究の発展が期待される。より質の高い、国際通用性のある報告を増やすためには、若手研究者に対する所属機関を越えたFDの実施や、研究者ネットワークの構築などを通して、相互研鑽の場を創出することなどが有益であろう。また、研究の質を上げるためには、授業や活動を越えて、研修者同士が研究対象を提供し合い、調査に適した研究方法を議論出来るオープンな研究環境の整備が欠かせない。さらに、機関発行の紀要等にもなるべく査読を取り入れ、投稿から採択に至るまで、複数の査読者による建設的なフィードバックで論文を洗練させる機会を増やすべきである。

今回の文献リサーチは、キーワードが合致せず、国際共修を扱う論文を取りこぼしたり、検索にはあがらないながらも、他のルートで知り得た報告をリストに追加する恣意的な収集を余儀なくされたりした。網羅的なデータ収集方法については今後の課題であるが、現在、進めている国際共修研究プロジェクトで、日本全国に散らばる研究者が自身の発表済みの論文や、研究の参考とした文献を共有できるプラットフォームの開発を検討している。教育実践者、研究者のネットワークを強化し、包括的な研究プロジェクトに発展させ、国際共修よるパラダイムシフトを先導したい。

参考文献

- Allport, C.W. (1954). *The Nature of Prejudice*. Cambridge, MA: Addison-Wesley.
- Kolb, D.A. (1984). *Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- McGrath-Champ, S., Zou, M., and Tayler, L. (2013). Exploring New Frontiers in an internationalized classroom: Team-based Learning and Reflective Journals as Innovative Learning Strategies. In Ryan, J. (eds.), *Cross Cultural Teaching and Learning for Home and International Students: Internationalisation of Pedagogy and Curriculum in Higher Education*. London: Routledge.
- Soria, K. M. and Troisi, J. (2014). Internationalization at Home Alternatives to Study Abroad: Implications for Students' Development of Global, International, and Intercultural Competencies. *Journal of International Education*, 18(3), 261-280

坂本利子・堀江未来・米澤由香子（2017）『多文化間共修：多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する』学文社

竹内比呂也（2012）「紀要というメディア：限りなく透明に近いグレイ？」『情報の科学と技術』62 巻 2号 p. 72-77